石狩の北前船を知る４側面と今に残る痕跡

石狩の北前船は、地理的には鰊漁場である北部の厚田・浜益の岩礁地帯と、鮭漁場である南部の石狩川河口の２つの寄港地、時代的には「弁財船時代」と石狩改革以後の「北前船時代」の２つ、あわせて４つの側面から見ていくとわかりやすい。

地域と時代を分けて、北前船が残した遺物・遺構をまとめた。

鮭：石狩川河口　弁財船時代

① 石狩弁天社狛犬。青みを帯びた福井産の笏谷石で作られている。② 場所請負人・村山家献上寒塩引鮭箱。家印「〇十五」が見える。③ 瀬戸内の白御影石で作られた鳥居（右の弁天社から左の八幡神社に移管）。北前船の重しとして運ばれた石造の遺物・遺構は、当時の痕跡として重要。

鰊：北部岩礁　弁財船時代

④ 古潭獅子頭。文久弐年願主浜屋与三衛門の銘。⑤ 村山家手船・彦久丸。天保８年蛎崎波響の筆。村山家の手船は松前だけでなく大坂まで往来した。⑥ 古潭鰐口。松前城下村山傳兵衛、寛政三年三月吉日の銘。

鮭：石狩川河口　北前船時代

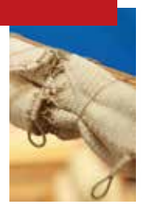
⑦ 石狩川河口に停泊した北前船（明治４年）。⑧ 石狩灯台（初代と現行）。明治 25 年に点灯され北前船を導いた道内最古の灯台。⑨ 開拓使石狩缶詰所の製品と建物。明治 10 年開設。⑩ 石狩鍋で有名な老舗料亭「金大亭」。⑪ 当時の百貨店「長野商店」。⑫ 石狩俳句文化「尚古社」の拠点、中島商店。

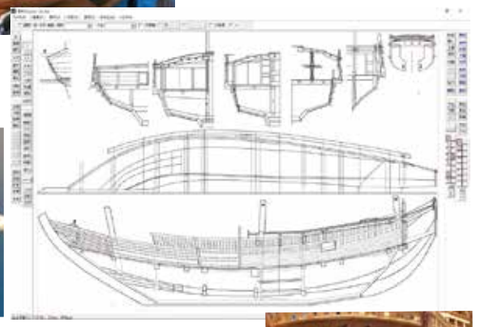
鰊：北部岩礁　北前船時代

⑬ 現存する鰊御殿の一つとして、当時の繁栄を今に伝える浜益・旧白鳥番屋。⑭ 古潭神社神輿　明治 13 年、大阪・久吉丸船主が寄進。⑮ 厚田豊漁記念碑。⑯ 厚田神社の船絵馬。⑰ 寺谷家文書。佐藤松太郎と北前船を共同経営した加賀寺谷家の帳簿類。⑱ 浜益沖揚げ音頭。

ジオラマの見どころ紹介

北前船





松前藩は船役（税）の基準となる船の石数を、帆柱と接する腰当船梁の幅を基準に決めたため、厳しい徴税を逃れて積載量を増やすため、北前船は前半部分の幅を時代とともに広げ、「どんぐり」と呼ばれる独自の形に変化した。

詳細な調査と設計により、細部まで北前船の特色を再現した。使用した材木は実船と同じ材質、帆の索装や舵の周辺も実船同様に操船できるよう制作した。

人形小道具

ジオラマの主役は、表情豊かな人形たちだ。色鮮やかな小道具も楽しい雰囲気を醸し出している。

およそ 130 年前に、厚田の人々が「宝船」のように待ちわびた北前船到着の喜びを、このジオラマを通して追体験していただきたい。

北前船と鰊漁場ジオラマ：道の駅石狩「あいろーど厚田」に展示
石狩市厚田区厚田 98-2　TEL　0133-78-2300

白鳥番屋と鰊漁場ジオラマ：石狩市はまます郷土資料館 に展示
石狩市浜益区浜益 77-1　TEL　0133-79-2402
共に　開館日、時間等を確認してください。

詳細は www.aikaze.net あいかぜ工房で

資料解説・写真：石　黒　隆　一（石狩市郷土研究会）
人 形 制 作：八　田　美　津（石狩市浜益区在住）
ジオラマ制作：石黒隆一・石黒美香子（あいかぜ工房）
発　　行：石狩市　企画経済部商工労働観光課

石狩を繁栄させた鮭漁・鰊漁と宝船（きたまえぶね）（べんざいせん）

上：白鳥番屋と鰊漁場
下：北前船と鰊漁場

←日本遺産認定証

石狩市 北前船寄港地船主集落として日本遺産に

2018 年５月に、石狩市が全国の 38 市町の一つとして「日本遺産・北前船寄港地船主集落」に認定された。北前船は、江戸時代中期から明治にかけて、大阪を基点に日本海を北海道まで航行した帆船の商船である。大阪や瀬戸内では、北と行き来する船という意味で「北前船」と呼ばれていたが、北陸や北海道ではその名称は使われず「弁財船」と呼ばれていた。石狩は日本遺産に認定された 38 市町では最北に位置し、北前船の重要な目的地の一つだった。

道の駅北前船ジオラマの舞台と時代

厚田神社に残る船絵馬

佐藤松太郎

弁財船投錨地碑・押琴湾

道の駅石狩「あいろーど厚田」は、旧厚田資料館の跡地に建設する事情から、道の駅としては異例な「地域の歴史・文化・自然を紹介する情報コーナー」を設置することが計画段階から決定していた。

厚田は、鰊の千石場所として栄えた地域である。「北前船と鰊漁場」をテーマとしてジオラマを制作することになった。舞台は北前船の寄港地だった厚田古潭の押琴湾、時代は大漁業家の佐藤松太郎が加賀の寺谷家と共同で北前船経営に乗り出した明治 25 年 (1892 年) に設定した。

会計責任者の知工は上陸のたびに金庫にあたる船箪笥を持ち出した。北前船の利益は一航海で千両といわれた。

宝船が運ぶ「下り荷」が人々の生活を支えた

ジオラマでは、中央に岬、岬の右手に本州から運ばれてきた下り荷、岬の左手の鰊漁場に厚田から出荷する上り荷を配置した。

下り荷は、当時の北海道では実質的に生産されなかった米をはじめあらゆる生活必需品である。「瀬戸内の塩を越後や荘内で売って、米や酒を仕入れた」というように、船主が荷物を寄港地ごとに購入販売して利益をあげる「買積み」という商売が北前船の特色だった。人々は下り荷を「宝船」のように待ち望んだと伝えられているが、実際の利益は、上り荷にはるかに及ばなかった。

① 陸揚げされた越後米や荘内米。
② 綿生地。古布も作業着にされた。
③ 醤油、味噌、酢、砂糖。
④ 九谷焼や輪島塗は今も伝わる。
⑤ 北陸の獅子舞は今も伝承されている。

鮭を求めて石狩川河口にやって来た北前船

石狩川河口で、明治４年（1871 年）に撮影された下の写真に、多くの和船形式の北前船が停泊していることが確認できる。

北前船は、石狩川に鮭を求めてやってきた。明治 13 年には、38 艘の北前船が石狩川河口にやってきて、約 50 万尾の鮭を購入したという記録も残っている。石狩産の鮭は高級食材として当時から全国で人気を集めていた。

江戸時代には蝦夷地の鮭の半分近くが石狩川で漁獲されたと伝えられるように、石狩は鮭と共に歩んだ町である。鮭が北前船を呼び寄せ、石狩を繁栄させた。

石狩鍋。石狩と鮭のかかわりを全国に伝えた。

左写真と右上「西蝦夷唐太道中記」は北海道大学附属図書館北方資料室蔵。

莫大な利益は「上り荷」の鰊粕がもたらした

道の駅のジオラマは、石狩川に鮭を買いに来た北前船ではなく、鰊を買いに厚田にやって来た北前船をモチーフにしている。北前船にとって、鰊が非常に重要だったからである。

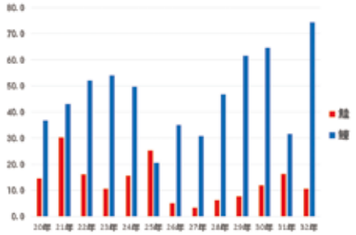
厚田神社には、明治 24 年に５万石の大漁があったという豊漁記念碑が残されている。５万石の鰊の粕は今の金額でおよそ 50 億円に相当する。

今は、食品の印象しかない鰊だが、かつてはほとんどが鰊粕に加工され、綿花、桑（絹の生産に必要）、藍、菜種、楮、果樹の肥料として利用されていた。

鰊粕は、消費地まで運べばいくらでも売れて「一航海千両（今の１億円）の利益」をもたらすといわれ、北前船の利益の源泉となった。明治になると国の綿布の輸出奨励によって、国内の綿花生産と鰊粕の需要は一層発展した。

明治期の北海道で農業や鉱工業の生産が軌道に乗るには長い年月が必要であった。そうした中で、全産業にしめる漁業の生産額は、明治初期の９割から明治中期にかけても半数以上に上っていた。鰊が漁業全体の７割、鮭と昆布がそれぞれ１割であった。

鰊粕は、開拓期の北海道を支える基幹産業として重要な役割を担っていたのである。

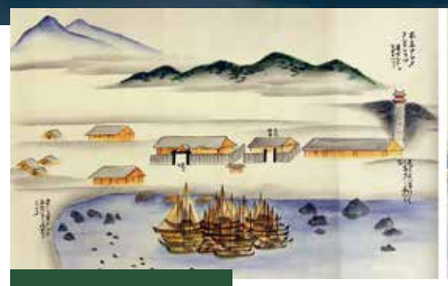


石狩、厚田、浜益の明治期の漁獲高。赤が鮭、青が鰊。鰊の漁獲高が大きいが、石狩では、鮭も健闘している。

三半船に満載された鰊を、もっこで運ぶ沖揚げの様子。大漁の時は休む間もなく続いた。

海水を沸騰させた大釜で鰊を煮て、角胴で圧搾して鰊粕を作る。

鰊粕の１俵は、24 貫（92kg）。かつげる人は力自慢と讃えられた。



石狩の北と南鰊と鮭の２つの寄港地が繁栄の秘密

石狩は、鮭の名産地であり、鰊の千石場所だった。鮭と鰊が北前船を呼び寄せ、地域を発展させていた。安政５年（1858 年）に描かれた、厚田古潭の押琴湾（左）と石狩川河口（右）の絵図（西蝦夷唐太道中記）は、石狩と北前船のかかわりを象徴的に示している。

松前藩は、米が生産できない蝦夷地を領地としたため、場所請負人からの運上金と交易船による出港税に依存していた。松前、江差、箱館に出港税を取り立てる沖の口役所を設け、北前船がこの３港以北に航行することを禁じた。この規制は、明治３年に沖の口役所が全廃されるまで続いた。

資料は、「石狩御用留・安政５年入船覚」である。右の「子日丸、彦久丸」は上に阿部屋伝次郎と書かれていて、それまで場所請負人だった村山家の手船である。中ほどから左に「大阪・正徳丸、越後・大吉丸、水戸・稲荷丸、越後・明運丸」という文字が見える。この入船覚の全体を見ると、この年に本州船籍の北前船 19 艘が、石狩川河口に入船していたことが確認できる。なぜだろう。

日米和親条約による箱館開港とロシアの脅威を背景に、安政２年（1855 年）に蝦夷地を再度直轄した幕府は、道央を管轄する拠点として石狩役所を置き、安政５年には、石狩支配を強化する「石狩改革」を行った。その時、石狩場所に来航する船に限って、直接石狩と本州を来航できる直艙を認めた。直艙によって北前船は、公式に石狩川河口に来航することができ、幕府石狩役所に莫大な利益をもたらした。

北と南に鰊と鮭の二種類の寄港地を持ったことが石狩繁栄の秘密だった。

改革後、石狩の浜役人をした五十嵐勝右衛門が残した石狩御用留の入船覚。（配置を一部変更）

直と船偏に風と書いて「直艙」。（じきはしり）村山家文書から。